

第3章 上之国館跡の歴史的背景【第14図参照】

第1節 「三館」前史

北海道で、本州の弥生時代から古墳時代前半にあたる時期は、稲作の文化が浸透せず、縄文文化の伝統を承け継いでいることから「続縄文文化」と呼ぶ。

それに続いて、本州の古墳文化などの強い影響を受けて7～8世紀頃に「擦文文化」が成立し、津軽海峡を挟んで北海道・東北北端部を中心に展開する。最後の土器文化と称された擦文文化の担い手たちは、本州から将来される米・布・鉄製品などとの交換のため、獣皮・鷲羽・干鮭・昆布などの交易品を獲得すべく漁撈狩猟に生業の比重を移し、道東・道北のオホーツク文化圏まで居住域を拡大していく。本州との持続的な朝貢や交易によってもたらされる「財」の浸透が擦文社会の内部を確実に変容させ、近世アイヌ文化の母胎を形づくっていくのである⁽²⁾。

渡島半島日本海側における擦文時代の遺跡としては、奥尻の青苗貝塚、松前の札前遺跡、厚沢部川河口遺跡、当町の大瀬下遺跡などが知られているほか、乙部の小茂内遺跡、松前の原口館遺跡や汐吹ワシリ遺跡などでは円形やコの字状の壕も発見され、「防御性集落」などと呼ばれている。

当地方の擦文文化は、立地環境的に河川よりも沿海を舞台とした生産活動が中心と考えられ⁽³⁾、青苗貝塚の調査ではアワビとニホンアシカの遺存体が圧倒的に多く検出されており、干貝や海獣皮が重要な交易品目の一つとして流通していたと考えられている⁽⁴⁾。

9世紀以前からヒグマやアザラシ、アシカなど北方域の好皮が都の王臣貴族の垂涎的であったようで、延暦21年(802)の太政官符(『類聚三代格』)では、出羽国の管轄下にあった「渡島狄」の秋田城への貢物が「雑皮」と知られ、延長5年(927)の『延喜式』には、奥羽両国の「交易雑物」として「羆皮」、「葦鹿皮」、「独犴皮」がみえる⁽⁵⁾。仁平3年(1153)の摂関家藤原氏の当主・左大臣頼長と平泉藤原氏二代目基衡との荘園の年貢増徴交渉で、山形県内陸部の大曾禰庄の年貢としてみえる「水豹皮」に擦文期の交易品の一端が窺える⁽⁶⁾。

12～13世紀になって擦文文化は終末期を迎え、その標式とされる擦文土器に代わって木器や漆器が用いられるようになり、隅丸方形でカマドのついた竪穴式住居も、囲炉裏中心の平地式住居に変化していく。

しかし、擦文時代終末期から15世紀初頭までの間は、考古学的な調査が行われている遺跡が少なく、歴史的に空白のような状態が長く続いている。

第2節 「三館」をめぐる歴史 —安藤氏から蠣崎・松前氏へ—

昭和50年代から、渡島半島の津軽海峡や日本海に臨む台地や丘陵上に立地する「館(たて)」と称される遺跡で、珠洲のすり鉢、青磁・白磁など舶載の陶磁器類や北宋銭、鉄製品などが地中から大量に発見される。それら出土遺物の考古学的な知見は15～16世紀の年代幅をもって提示され、「よみがえる中世」として紹介されるようになった。

「館」を交易拠点として渡島半島南部に割拠した諸館主層と、先住の「アイヌ」とのせめぎ合いの中から、下北の土豪・蠣崎氏が「夷賊襲来」に備えて花沢・洲崎・勝山の三館を相次いで築造し、日本海北方交易における権益と道南における政治的な覇権を掌握して、幕藩体制下で「無高大名」松前氏として定立していくまでの様相を、北奥羽に割拠した安倍姓安藤氏や糠部南部氏などとの関わりの中から以下通史的に素描してみる。

【蝦夷の大乱と鎌倉幕府の滅亡】

「奥六郡の司」安倍氏や「出羽山北の俘囚主」清原氏、「東夷之遠酋」「俘囚之上頭」と自称した平泉藤原氏を継いで北奥に雄飛した安藤氏は、津軽地方を所領していた北条氏の被官(地頭代)として、鎌倉幕府の執権義時の代から「蝦夷沙汰代官職」に任じられ、中世国家の東の境界領域における支配(「蝦夷の沙汰」)を委ねられていた。また、安藤氏は「安倍」姓を名乗り、神武によって東の境界・外が浜に追放された安日の末裔「醜蛮(エゾ)」の系譜に連なるを自認する一族でもあった⁽⁷⁾。

鎌倉幕府滅亡の大きな要因となったものの一つに、14世紀前半における夷島と北奥羽を舞台にした「蝦夷の大乱」が挙げられる。この発端は文永年間に蝦夷の反乱で蝦夷沙汰代官職の安藤五郎が「エゾ」に首を取られたことにある。

この反乱は、黒龍江（アムール川）河口部のギリヤークの境界をたびたび侵し、文永23年(1286)遂にモンゴルの元帝国によって征討されることになったサハリン方面の骨嵬（クイ）（アイヌ）の擡頭と一連のものと考えられ、同時代人の日蓮が「文永5年(1268)の比、東には俘囚をこり、西には蒙古よりせめつかひつきぬ」と記したように、元帝国世祖フビライの国使が朝貢・服属を迫るという未曾有の国難と同一位相で認識されていた⁽⁸⁾。

その後、文保2年(1318)に蝦夷は一時静穏になったものの、翌々年の元応2年(1320)の出羽の蝦夷の蜂起をきっかけに北奥羽は騒乱状態になる。安藤惣領家に預け置かれた「蝦夷の沙汰」が困難な状況が現出し、安藤氏一族の嫡流争い、分裂抗争にまで発展する⁽⁹⁾。

得宗北条高時は、鎌倉の鶴岡社や金沢称名寺に蒙古退散祈祷と同じ修法で蝦夷降伏祈祷を命じたが、反乱は鎮まらなかったため、正中2年(1325)、蝦夷沙汰代官職の安藤又太郎季長を更迭し、従兄弟の安藤五郎三郎季久に補任させる。これが内紛にいっそう拍車をかけ、季久派と季長派は惣領の地位をめぐる、外浜（津軽半島の陸奥湾側沿岸）の内末部と、西浜（津軽半島の日本海側沿岸）の折曾関にそれぞれ城郭を構え、各々「夷賊を催集」めて、津軽半島を東西に二分する洪河（岩木川？）を挟んで相対した。幕府は関東の有力御家人らを「蝦夷追討使」として派兵し、1兩年かかってようやく和談にこぎつけたが、まもない元弘3年(1333)に鎌倉幕府は滅亡する⁽¹⁰⁾。

新代官職に就いた季久は名乗りを宗季に改め、正中2年(1325)に男子犬法師（高季）と女子虎御前に所領を譲る文書を残している。それには、「えその沙汰」のほかに、津軽鼻和郡絹家島・尻引郷・片野辺郷、糠部宇曾利郷（郷内の田屋・田名部・安渡浦は虎御前の分）・中浜御牧・湊以下の「地頭御代官職」がみえ、その5年後、やはり宗季が高季に与えた讓状には、関・阿曾米を除く津軽西浜もみえる。この讓状に外が浜はみえないが、安藤惣領家の所領は津軽の岩木川中流域の弘前市域一帯を中心に、十三湊を含む津軽半島西岸や下北半島をも含む広大なものであった⁽¹¹⁾。

【「蝦夷の沙汰」としての夷島流刑と渡党】

宗季讓状の「えその沙汰」は、鎌倉末期の法律書『沙汰未練書』にみえる幕府の三大政務「武家ノ沙汰」の一つ「東夷成敗権（「東夷成敗事、於関東有其沙汰、東夷蝦子(えぞ)事也」）を現実に執行する所職と考えられている⁽¹²⁾。

「えその沙汰」を執行する正官は得宗北条氏（当初は陸奥国府留守職伊沢氏？⁽¹³⁾）で、それを現地で代執行する代官が安藤氏で、その代官職を代々世襲したことから、同氏の家職になっていた⁽¹⁴⁾。

遠藤巖氏は、幕府による「蝦夷の沙汰」の一環をなすものとして、夷島支配や夷島との交易統制に併せ、夷島流刑も「東夷成敗権」に基づくものであるとした⁽¹⁵⁾。頼朝が奥州合戦で平泉藤原氏を滅ぼした文治5年(1189)の3年後、建久2年(1191)には、早くも京都の官人（強盗）10人の夷島流刑が「奥州夷」安藤氏によって執行されている⁽¹⁶⁾。

夷島流刑の記事は『吾妻鏡』に5例しかみえない⁽¹⁷⁾が、『新羅之記録』は、奥州外が浜に下し遣わされ、「狄の鳴」に追放された海賊や強盗（「悪党」）を、奥州の存亡を賭けた合戦で敗れ、糠部津軽より逃亡した者たちとともに「渡党」と呼んでいる。

「渡党」の初出は『諏方大明神画詞』（延文元年(1356)成立）で、蝦夷カ千嶋（北海道島）に「日の本」・「唐子」とともに群居する「渡党」のようすが描出されている。「渡党」の多くは「和国ノ人」に相類しており、髭鬚が多く、「遍身」に毛が生え、言葉は「俚野」であるが、大半は相通じ、「奥州ノ津軽外浜ニ往来交易」しているという。その「渡党」の中に、戦場に臨むときには、遺骨を鎌として毒を塗り、甲冑・弓矢を帯びて先陣に進む男子や、「後塵」に随って幣帛を持ち、天に向かって誦呪する婦人が描かれている。戦陣誦呪（ウケエホムシュ）やイナウ、トリカブトを示唆する毒矢などは、いわゆる近世アイヌの特徴的な民俗を表象するものである。

佐々木利和氏は「渡党」の居住域を、渡島半島西南部を中心に「下北半島から野辺地湾岸までを含めた地域」とされた⁽¹⁸⁾が、この居住域は安藤氏の本拠と考えられる津軽鼻和郡と外が浜を除けば、宗季讓状

の所領とほぼ重なる。

蝦夷カ千嶋に群居した三類のうち「日の本」と「唐子」は言語不通で外国に連なっているとされたが、「渡党」は流刑や逃亡だけでなく、流浪なども含む土着した本州人の末孫のほか、渡島半島や津軽・下北・夏泊半島の先住の「アイヌ」をも確実に取り込むものであり、海峡を挟んだ「境界領域」を活動範囲とする「雑居」的な人間集団と定義できよう⁽¹⁹⁾。

こうした「渡党」の中から、松前廣長が「諸館主者古方俗所謂渡党也」(『福山秘府』)と書き留めたように、のちの蠣崎氏をはじめ諸館主層が日本の東の果ての「境界領域」で、その境界ゆえの両属性の上に立ち、頭角を現してくるのである⁽²⁰⁾。

【十三湊と秋田湊の安藤氏】

安藤氏が根拠をかまえた十三湊は、『十三往来』で知られるように「夷船京船」群集して湊に市をなし、室町後期成立の『廻船式目』では、「三津七湊」の一つ「奥州津軽十三の湊」と数えられていた。現在も精力的に十三湊の発掘調査が進められているが、十三湊が最盛期を迎えるのは14世紀後半から15世紀前葉と考えられている⁽²¹⁾。

宗季議状にみられる「嶋」「浜」「湊」「浦」などという所領の沿海性は、安藤氏の配下に海運や交易と深い関わりをもつ「海の民」を想起させる。そのような非農業生産を基盤とした「海の領主」下国安藤氏は、応永30年(1423)足利将軍5代義量の新将軍就任祝いに「馬二十匹。鳥五千羽。鷲眼(錢)二万匹。海虎皮三十枚。昆布五百把」を献上する。室町幕府の史書『後鑑』にみえる記録であるが、下国安藤氏の経済基盤が交易を通じて遠く北方域にまで及んでいたことを物語るものである。また、永享8年(1436)には「奥州十三湊日之本将軍」として名高い安倍(安藤)康季が勅願寺の若狭国羽賀寺(福井県小浜市)を再興しており、日本海を媒介とした商業・海運を通じて得た経済力には瞠目すべきものがある⁽²²⁾。

安藤氏一族は以前から、出羽の小鹿島(秋田県男鹿市)や秋田方面へも勢力圏を広げており、有力な庶流としては、津軽外が浜の潮潟(青森市後潟)を本拠とした潮潟安藤氏のほか、秋田の土崎湊を根拠とした湊安藤氏があった。

湊安藤氏は、津軽十三湊下国盛季の舎弟鹿季が、応永2年(1395)鎌倉時代の秋田城介安達氏の流れを汲む「蝦夷の沙汰」を足利義満から任され、出羽国秋田の新領主として擁立させられたことに始まる。以後、秋田湊の安藤家は下国安藤家とともに「京都御扶持衆」の家柄として、代々「左衛門佐」の官途を極官とする扱いを受けている⁽²³⁾。

宣教師ルイス・フロイスが「日本国の北方殆ど北極の真下に蕃人の大なる国あり(中略)彼等の中にゲワ ○出羽 の国の大なる町アキタ ○秋田 と称する日本の地に來り、交易をなす者多し。」(永禄8年(1565))と記したように、秋田は夷島の住人が渡海し交易する港でもあった。石山本願寺末寺の夷島上国浄願寺を庇護し、エゾ錦とみられる錦などの末寺年貢を本願寺まで送り届けたのは、他ならぬ「海の領主」たる秋田湊家であったという⁽²⁴⁾。

蝦夷沙汰代官職・安藤五郎の系譜に連なる下国・湊両安藤家は日本の東の果ての境界領域を挟んで相貌を違える東西の世界を跨いで政治・経済的に定立する境界領域に固有な権力ということができる⁽²⁵⁾。

【十三湊安藤氏の没落と信廣の渡海】

奥州合戦ののち、鎌倉殿の御家人として糠部郡に所領を得、広大な馬牧と産馬を背景に擡頭し、急速に勢力を拡大していた南部氏が津軽を侵略し、下国安藤氏の拠点十三湊を急襲する事件が起きる。

永享4年(1432)、『満濟准后日記』が「奥ノ下国与南部弓矢事二付テ、下国弓矢二取負。エソカ島へ没落云々」と記すように、下国安藤氏は三戸南部氏に敗れ、蝦夷島に逃れたが、室町幕府による和睦斡旋で再び十三湊に戻ることがあったと考えられている。しかし、嘉吉2年(1442)、南部氏は再び十三湊に侵攻、翌年安藤氏は夷島に逃走する。その後、安藤氏は再三津軽の奪還を試みるが、いずれも失敗に終わり、蝦夷沙汰代官職を世襲してきた安藤氏の惣領家は断絶する。この事件は、中世国家の東の境界領域に激震を引き起こし、以後の夷島における動乱の序幕を告げるものであった⁽²⁶⁾。

十三湊陥落のとき、潮潟安藤重季の長男であった師季は弱冠にして南部氏の捕虜となり、糠部の八戸に連行され、擁立されて南部領下北の良港田名部湊を知行することになった。南部氏の目論見は、分家筋の

師季を担ぎ出して、傀儡的存在として安藤家の名跡を師季に継がせ、北方海域における海上交通を支配していた安藤惣領家の権益を篡奪することになったという⁽²⁷⁾。

ところが、享徳3年(1454)に師季はひそかに田名部湊を逃れ、南部氏の麾下を脱して大畑湊から夷島へ渡海し、自立を企てる。このとき、師季に随行したのが、松前氏の祖とされる武田信廣であり、また、のちに松前守護の輔佐となる相原政胤や箱館の館主となる河野政通らであった。

【夷島の動乱と信廣の擡頭】

津軽・下北の動乱は対岸の夷島にも波及し、康正2年(1456)春、数百軒の鍛冶屋が軒を連ねていた、函館東郊志濃里の鍛冶屋村でマキリの善悪価が原因となって鍛冶がオッカイ（アイヌ語で「少年」のこと。）と争い、マキリで殺害するという事件が勃発する。これを発端に長禄元年(1457)5月、東部エゾの首長と考えられるコシャマインを先頭に「夷狄」の蜂起が起き、内海のウスケシ（函館の古名）が攻落される。いわゆる「コシャマインの戦い」である。

その頃、渡島半島南部には、「渡党」が築いた「道南十二館」と呼ばれる「館」が存在していたことが記録されている（『新羅之記録』）が、その館主の多くが安藤宗家の通字である「季」の一字を冠して名乗っていることから夷島における安藤氏の配下、それに連なる者と考えられる。

コシャマインの戦いの前夜、ウスケシ全盛の頃には、毎年三回ずつ若狭国より廻船が来着していたとの記録（『新羅之記録』）があるが、南北朝～室町時代の諸国の産物を集輯した『庭訓往来』が蝦夷地の土産物として挙げる「宇賀昆布」と「夷鮭」が主な交易品であったと考えられ、日本海沿岸諸港をつなぐ遠隔地交易が盛んであったことが知られる。

北方交易における海上交通の安全を保障していたのは、安藤氏が掌握していた津軽・下北から夷島西南部にかけての制海権だと考えられている⁽²⁸⁾。南部氏の侵攻による海上交通の安全保障体制の崩壊は、十三湊や外が浜、下北の諸湊など交易地を機能不全に陥れ、若狭など日本海沿岸諸湊とを結ぶ商品流通のネットワークに分断をもたらし、渡島半島西南部の在地住人や安藤氏配下の館主層に大きな動揺と混乱を与えた。本州社会との交易に深く依存し、米や鉄製品などを入手しなくてはその社会の存立が困難になっていた道南の在地住人による、南部氏の手へ渡った外が浜や下北の諸湊へ直航しての交易の企ては、館主層たちにとって自らの既得権益を大きく損なうものであり、渡航の阻止や交易統制の挙に出たものと推察されている⁽²⁹⁾。

そのような蠣崎氏をはじめとした館主層と、政治的に成長した在地住人の首長層との利害の衝突、在地住人にとっては自由な交易をもとめた闘いがこの後も続き、夷島は糠部南部氏と下国・湊安藤氏のはざまにあつて争乱の渦に呑み込まれていくことになる。

夷島に落ち着いたかにみえた安藤師季（のちに「政季」と名乗る。）は、わずか2年後の康正2年(1456)に同族である秋田湊の「秋田城介」安藤堯季に請われて、出羽の小鹿島に進出し、のちに出羽北部の河北郡に移る。政季のあとを継いだ忠季は明応4年(1495)に檜山の地に築城し、以後政季の血統は檜山安東氏、もしくは「檜山之屋形」と呼ばれるようになるが、北方海域における制海権は南部氏に伍して檜山安東氏も日本海ルートを確保し、かつ夷島に対する宗主権を維持し続けたという⁽³⁰⁾。

『新羅之記録』は、安藤太政季が出羽小鹿島への再渡海に際して、渡島半島南部における交易の権益を守るべく「夷賊襲来」に備え、渡島半島南部に三人の守護を配する「三守護体制」を敷き、要衝の地松前には安藤定季、下之国は舎弟の安藤家政、上之国は武田信廣に預け、それぞれの補佐として、政季の夷島渡海に同道した相原政胤、河野政通の兩名、下北の蠣崎出身で花沢館の館主であった蠣崎季繁の3名を副え置いたと書く。この「三守護体制」について、実質は松前守護を中心とした一守護体制との指摘⁽³¹⁾もあり、また上ノ国の守護は季繁が真実で、信廣は補佐役であったとする見解が定説となっている。

【蠣崎氏の覇権確立】

政季の再渡海後まもなくコシャマインの戦いが起こって、道南十二館と呼ばれる館を次々と打ち破られ、守護として松前にあった安藤定季の大館も攻略された。『新羅之記録』は、その中で下之国茂別館の安藤家政と、上之国花沢館の蠣崎季繁だけが堅固に城を守って陥落をまぬがれたと書く。

この時、信廣は、惣大将としてコシャマインの戦いを制し、その戦功を認められて、季繁の養女（実は

安藤政季の息女という。)の婿に迎えられ、「川北天河」の洲崎の館に居を構えて、蠣崎氏の家督を継ぐ。政季の息女を配された信廣は、この後「安東太政季の婿」として発言力を増していくことになる。

寛正3年(1462)季繁が没すると、後継者の信廣はさらなる勢力拡大のため、洲崎の対岸の地に、「夷賊」の来襲にそなえた堅牢無比の山城・勝山館を築造する。遠来の浪人や職人・工人、在地住人など各階層を囲い込むとともに、鉄製品などを交易品とした北方交易を通じて党的な結合を図って人心を掌握し、明応3年(1494)に没するまで、道南における政治的覇権の掌握へと突き進んでいく。

定季没後、跡を継いだ息男の恒季は明応5年(1496)に自害し、松前守護職は相原季胤(政胤の嫡男)に預け置かれた。永正9年(1512)、長禄元年の戦乱の引き写しでも見るかのように、また「夷狄」による諸館への再攻撃がはじまる。再興されていたという宇須岸・志濃里・与倉前の三館が陥落し、館主はみな自害、同10年(1512)には松前大館も落城し、寺社も焼亡する。松前守護の相原季胤と輔佐役の村上政儀は自殺し、僧侶や禰宜も誅殺されている。

同11年(1514)、信廣の跡を継いだ光廣は、長子良廣とともに小舟180余艘に乗り列ねて南下して松前大館に進駐する。この旨を檜山安東氏の当主尋季(政季の嫡孫)に報告するため使者を派遣するが、3度目の使者・紺備後広長という牢人が諸州から来る商船・旅人から徴収した年俸(船役)の過半を檜山に上納することを条件に、「狄の嶋の支配を良廣に預ける、国内を宜しく守護せよ」という判形を持ち帰って、ようやく蠣崎氏は、檜山安東氏の夷島支配の権限を現地で行使する代官として認められ、実質的に松前守護職の地位に就くことになる。

松前大館をはじめとした諸館の陥落は「夷狄」の攻撃によるものと、『新羅之記録』は記述しているが、多くの研究者は幾つかの綻びと矛盾を指摘し、松前守護相原氏の滅亡は、上之国の蠣崎氏の陰謀、東部エゾとの連合もしくは茂別館の下国氏と連合しての陰謀による松前守護職の篡奪だとする。

【蠣崎氏の無高大名への道】

蠣崎氏四世季廣(良廣の嫡男)の時代、天文20年(1551)に東西エゾとの間で講和が成立し、上ノ国にはセタナイ(瀬棚)のハシタイン、知内にはシリウチ(知内)のチコモタインという東西エゾの首長を置き、同時に諸国から来る商賈から徴収した年俸の一部を「夷役」として東西のエゾに分与するという「夷狄之商船往還之法度」という協約が結ばれる。『新羅之記録』は、「その後西より来る狄の商船は上ノ国天河の沖で、東から来る夷の商船は知内の沖で帆を下げ一礼をして往還している」と書くが、この協約は、松前城下に交易船を集中させる城下交易体制の確立を企図したもので、松前との間を往還する「夷船」の管理統制が東西エゾの首長に委ねられていたものと解することができる⁽³²⁾。

このようにして北方交易を管掌する夷島代官に就いた蠣崎氏ではあったが、依然として檜山安東氏に対しては、幾度も軍役勤仕に応じるなど被官として従属していた。天正6年(1578)最後の「日の本將軍」にも喩えられる檜山安東愛季が秋田湊安藤家との統合を成し遂げたが、季廣・慶廣父子のうち一人はつねに愛季の膝下に勤番させられていたという⁽³³⁾。

天正18年(1590)の太閤秀吉の奥州仕置きに伴い、信廣から数えて五代目の慶廣は秀吉の聚楽第に「狄の嶋の主」として謁見する。天正19年(1591)、南部一族の九戸政実が秀吉に反旗を翻すが、慶廣はいち早く津軽海峡を渡って九戸攻略の秀吉の下に家臣のみならず多くの「蝦夷人」を率いて参陣し、慶廣が夷島の唯一の支配者であることを広く天下に示したという⁽³⁴⁾。

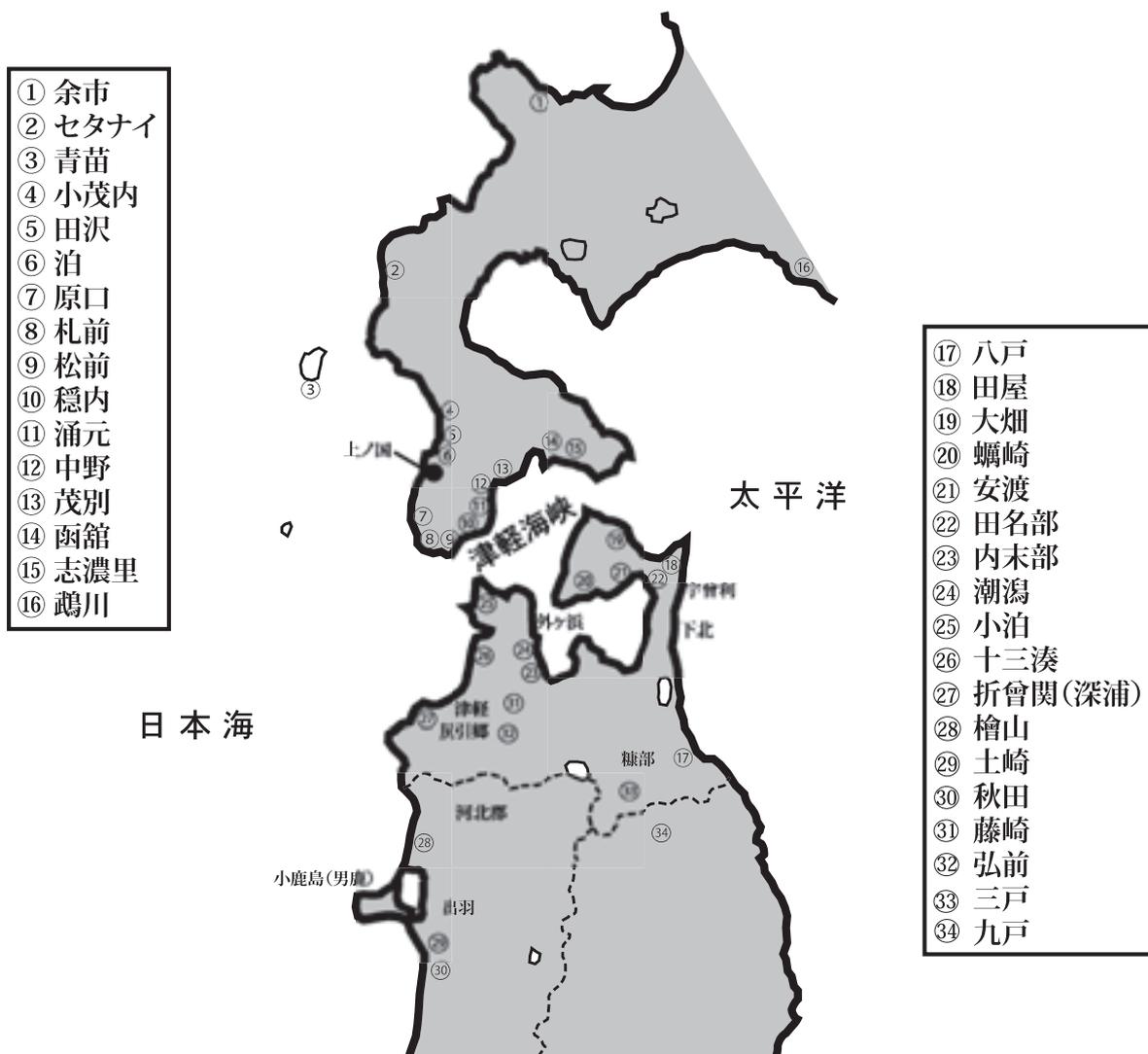
愛季亡き後、家督を継いだ安東実季は、関白秀吉が発した関東奥州惣無事令に違背した廉で怒りを買っており、天正19年に発給された実季宛の領知宛行状に「蝦夷ヶ島」は含まれていなかった。一方、慶廣は文禄2年(1593)に朝鮮侵略のため肥前名護屋にいた秀吉から、「夷人」に対する非分禁止の強化と、船役徴収権を従来どおり認めるとの朱印状を発給され、これにより秋田安藤氏の羈絆を脱し、独立した「大名権力」として公認されることになるのである。

慶廣は慶長4年(1599)に蠣崎から松前と姓を改め、慶長9年(1604)には、幕府を開いた征夷大將軍徳川家康からアイヌと交易ができるのは唯一松前氏であることを公認した黒印状が発給され、ここに松前藩が成立する。しかし、松前藩が直接支配する領域は渡島半島西南部の狭小な一部にすぎず、幕藩体制下では異端の「無高大名」として生きていくことになるのである。

このようにして蝦夷の系譜に連なる安藤氏による「蝦夷の沙汰」は終止符を打つことになるが、これは

同時に異域としての「蝦夷地」を舞台に、渡党の後裔たる「狄の島主」慶廣による「エゾ (=アイヌ民族)」支配の新たなる展開の始まりを意味するものであった⁽³⁵⁾。松前氏は、「渡党」としての自らの内なる系譜をかなぐり捨てて、こののち「和人」大名として転化していくことになるのである。その象徴が、『新羅之記録』が描いた若狭国守護武田氏の御曹司という信廣の貴種流離譚であろう⁽³⁶⁾。

元和7年(1621)、宣教師アンジェリスは、東はメナシから百艘の船がラッコの皮などを、西は天塩から蝦夷錦などを積んで来る、日本からは毎年大きな船が三百艘ほど松前に渡っている、と松前城下での交易の様子を記している(『北方探検記』)が、いわゆる「天文の和議」で意図した城下交易体制は幕藩体制の傘下に入ることによってほぼここに結実し、以後アイヌ交易独占権と蝦夷地・本州間の流通統制を立藩の経済的な基礎とした松前藩は、明治維新によって幕府が瓦解するまで約260年間存続することになるのである。



第14図 史跡上之国館跡 関係地図